

個人間上方比較過程に及ぼす集団文脈、 課題のプロトタイプ性、個人性の2要素の影響

浦 光博*・磯部智加衣**

*広島大学総合科学部

**広島大学大学院生物圏科学研究科

The influence of group context, task prototypicality, and two components of individuality on the interpersonal upward comparison process

Mitsuhiro URA* and Chikae ISOBE**

**Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University*

***Graduate School of Biosphere Sciences, Hiroshima University*

Abstract: Through 4 studies, the influences of group context, task prototypicality, and two components of individuality on the interpersonal upward comparison process was examined. Study 1 showed that interpersonal upward comparison with ingroup member (vs. outgroup member) and on the task area with high ingroup (vs. outgroup) prototypicality gives higher threat to individuals' self-evaluation. In study 2, reliability and validity of the scale of two components of individuality Japanese version were confirmed. Study 3 showed that for people who are high in both differentiation and independence dimensions of individuality, threat from the upward comparison with the ingroup member was low. Finally, study 4 demonstrated that the effect of two components of individuality on aversive influence of the upward comparison does not reflect the effects of self-esteem which has high correlation with the independence dimension of individuality.

Key words: two components of individuality, interpersonal upward comparison, group prototypicality of the task

第1部 集団間—集団内文脈と課題のプロトタイプ性

内集団成員との比較と課題の集団プロトタイプ性

内集団における優秀な成員が他成員の嫉妬や排斥の対象となる場合がある。それは彼ら彼女らが、他者に対して上方比較対象となる場合である。一般に内集団における他成員は外集団成員と比較して個人にとって近しい他者であるため、社会的比較の対象となりやすく (Festinger, 1954)、特に優秀な成員は他者に対して劣等感を生じさせる源泉となりやすい。そのため、人々はそのような優秀な他者

との間の対人的な距離を広げ、比較によるネガティブなインパクトを小さくしようとするのである。

また、このような社会的比較が行われる課題領域の影響も無視できない。自己評価維持モデル (Tesser, 1988) によると、人は自己評価に密接に関連する課題における自分と近い他者の成績を知った場合、個人間比較過程に従事しやすくなるという。そして、その他者の成績が自分のものよりも優れている場合には、自己評価に対する脅威を感じるという。さらに、この脅威を低減させるために、人は優れた他者との間の距離を大きくしたり、課題の自己関連性を低く見積もったりするのである。

この課題の自己関連性を左右する条件の一つに、課題の集団プロトタイプ性がある。これは、たとえば男性らしい課題あるいは女性らしい課題といったように、ある課題の特性と特定のカテゴリー成員性との一致の程度によって表される。社会的アイデンティティ理論に基づけば、カテゴリー成員性は個人の自己評価の重要な源泉のひとつである (Tajfel, 1978)。そのため、自分にとっての内集団のカテゴリー特性に一致した特性を持つと認知される課題は、そうでない課題よりも自己評価に密接な関連性を持つといえる。

このように、社会的比較過程の理論や、自己評価維持モデル、あるいは社会的アイデンティティ理論の枠組みから考えるならば、人は自分よりも優れた内集団成員との社会的比較によって、あるいは内集団プロトタイプ性の高い課題での社会的比較によって、自己評価への強い脅威を経験するだろうとの予測が可能となる。

外集団成員との比較と課題の集団プロトタイプ性

上述のとおり、内集団での個人間比較に及ぼす課題のプロトタイプ性の効果に関しては、自己評価維持モデルの観点からの予測が可能である。では、個人間比較が集団間にまたがる場合、すなわち外集団成員との個人間比較過程においては課題の集団プロトタイプ性はどのような効果を持つのだろうか。

すでに述べたとおり、社会的アイデンティティ理論から考えると、特定の集団プロトタイプ性の高い課題はその集団の成員、すなわち内集団成員にとって自己評価の重要な源泉のひとつである。そのような課題においては、内集団成員が外集団成員より優れた成績を上げることは、いわば当然のことと受け止められているだろう。にもかかわらず、そのような課題において外集団成員が自分よりも高い成績を上げたとすれば、人は自己評価にとっての重要な基盤を失うことになる。言い換えれば、そのような外集団成員の存在は個人に大きな自尊心脅威をもたらすと予測できる。

逆に、外集団プロトタイプ性の高い課題において外集団成員が自分よりも優秀であったとしても、それはやはり当然のこととして受け止められるだろう。そのため、そのような外集団成員の存在は個人に自尊心脅威をもたらさないと予測できる。

研究1 個人間上方比較過程に及ぼす集団文脈と課題のジェンダープロトタイプ性の影響

本研究では以上の予測をジェンダーカテゴリーを題材として検証する。まず内集団-外集団の区別をジェンダーの組み合わせによって構成する。すなわち、男性にとって自分よりも優秀な男性と女性にとって自分よりも優秀な女性の双方を、内集団上方比較対象とする。また、男性にとって自分よりも優秀な女性、女性にとって自分よりも優秀な男性を外集団上方比較対象とする。

次いで、ジェンダーと課題特性との組み合わせによって課題のジェンダープロトタイプ性を操作する。本研究では、男性プロトタイプ性の高い課題として数学を、女性プロトタイプ性の高い課題とし

て言語をそれぞれ取り上げる。これらはいずれも先行研究がそれぞれのジェンダープロトタイプ性が高いものとして扱ってきた課題である（たとえば、Swim & Sanna, 1996）。これらの課題を題材として用い、まず、男性にとっての数学課題と女性にとっての言語課題を、内集団プロトタイプ性の高い課題とする。また、男性にとっての言語課題と女性にとっての数学課題を外集団プロトタイプ性の高い課題とする。

このような内集団－外集団文脈と課題のジェンダープロトタイプ性との組み合わせについて、上述の比較過程に関する議論から、以下の一連の仮説が導かれる。

仮説1 人は、上方比較の対象者が内集団成員である場合に、外集団成員である場合よりも、自己評価に対する強い脅威を経験するだろう。

仮説2 人は、上方比較の行われる課題領域が内集団プロトタイプ性に一致している場合に、一致していない場合よりも、自己評価に対する強い脅威を経験するだろう。

仮説3 人は、内集団成員が内集団プロトタイプ性の高い課題で上方比較対象となる場合に、外集団プロトタイプ性の高い課題で上方比較対象となる場合よりも自己評価に対する強い脅威を経験するだろう。

仮説4 人は、外集団成員が外集団プロトタイプ性の高い課題で上方比較対象となる場合に、内集団プロトタイプ性の高い課題で上方比較対象となる場合よりも、自己評価に対する弱い脅威を経験するだろう。

本研究では、質問紙法を用いて以上の諸仮説の検証を試みる。

【方 法】

回答者

広島大学学生462名（男子198名、女子261名、不明3名、平均年齢18.39歳、 $SD=0.62$ ）。

対象人物の想起

4種類の質問紙を用意した。課題領域として数学と言語の2条件を設け、さらに個人間比較の対象人物の条件として男性条件と女性条件の2条件を設けた。質問紙の冒頭には、現代社会におけるそれぞれの課題能力の重要性を強調する文章が示されていた。回答者はその文章を読んだ後、自分と同世代の仲間のうちいずれか一方の課題において自分よりも高い能力を持つ男性あるいは女性を思い浮かべるよう求められた。

尺 度

上方比較対象への態度尺度 想起された上方比較対象者が回答者にとってどのような存在なのかを問う14項目の尺度である。それぞれの項目に対して「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）までの5段階での回答を求めた。この尺度は、拒否的態度、劣等感、誇り、励みの4次元からなる（磯部・浦，投稿中）。このうち、拒否的態度とは、文字どおり比較対象を拒否しようとする態度のことである。劣等感とは、比較対象が自分に劣等感を感じさせる対象であると捉える程度の強さを表す。以上の2次元は、比較対象によって引き起こされる自尊心脅威の程度を示す次元である。また、誇りとは文字どおり比較対象をどれくらい自分にとっての誇りと考えるかの程度を表し、励みとは比較対象の成績をどれくらい自分にとっての励みとするかの程度を表す。これら2次元は、比較対象と自己をどれくらい同一視し、その優秀さを自分自身の自己評価に反映させるかの程度を示す次元である。

親密性評価尺度 回答者と対象者との間の親密性を問う 1 項目の尺度である。「とても親しい」(1点)から「ぜんぜん親しくない」(5点)までの5段階に、「思い浮かべることができなかった」(6点)を加え6段階を設けた。

課題の集団プロトタイプ性評価尺度 数学能力あるいは言語の運用能力のそれぞれが、どれくらい男性性あるいは女性性の高い課題なのかについて回答者の評価を求める 1 項目尺度である。数学能力あるいは言語能力について、それを全体の平均値としてみたとき一般にどのような男女差があると考えているかを問い、「男性のほうがかなり高い」(1点)から「男女差はない」(5点)を経て「女性のほうがかなり高い」(9点)にいたる 9 件法の尺度である。

集団内-集団間比較尺度 回答者自身の数学能力あるいは言語能力が、平均的な男性(女性)と比較してどの程度高いかあるいは低いかを問う 2 項目からなる尺度である。いずれも「平均的な男性(女性)よりもかなり低い」(1点)から「平均的な男性(女性)ぐらいの能力である」(5点)を経て、「平均的な男性(女性)よりもかなり高い」(9点)にいたる 9 段階で回答を求めた。回答者が男性(女性)の場合には、平均的な男性(女性)との比較の項目が集団内比較項目となり、平均的な女性(男性)との比較の項目が集団間比較項目となる。

課題の重要性評価尺度 数学能力あるいは言語能力の高さが、人生の成功にとってどれくらい重要な役割を果たすかについて回答者の評価を問う 1 項目の尺度である。「特に重要な役割は果たさない」(1点)から「とても重要な役割を果たす」(9点)までの 9 件法である。

【結 果】

予備的分析

分析対象者 回答者462名のうち、求められた上方比較対象を思い浮かべることができなかった者と回答が不完全であった者は分析対象から除外した。結果として、最終的な分析対象者は348名である(有効回答率75.3%)。

態度尺度の構造 確認的因子分析によって、上方比較対象への態度尺度が想定された 4 因子からなることが確認された ($GFI=.910$, $AGFI=.868$, $CFI=.918$, $RMSEA=.087$)。下位因子ごとの内的整合性は、拒否得点が $\alpha=.86$ 、劣等感得点が $\alpha=.82$ 、誇り得点が $\alpha=.80$ 、励み得点が $\alpha=.74$ であった。

課題の集団プロトタイプ性 課題の集団プロトタイプ性得点を従属変数とする課題領域×性別の分散分析の結果、課題領域の主効果が有意であった ($F(1/353)=199.10$, $p<.001$)。数学 ($M=3.70$, $SD=1.09$) は言語 ($M=5.31$, $SD=1.06$) よりも、より男性性が高いと評価されていた。それぞれの課題特性が想定されたジェンダーに関連すると評価されているかどうかの確認のため、各課題特性の平均値が中央値である 5 点から男性性、女性性それぞれの方向に有意に偏っているかどうかを対応のある t 検定によって検討した。結果は、数学は有意に男性性の方向に偏っており ($t(185)=19.22$, $p<.001$)、言語は有意に女性性の方向に偏っている ($t(170)=8.95$, $p<.001$) ことを示していた。両課題のプロトタイプ性の強さに差が無いかを検討するため、5 点からの差の絶対値を従属変数とし、課題領域を独立変数とする t 検定を行ったところ、有意な差が認められ ($t(355)=7.52$, $p<.001$)、数学 ($M=1.38$, $SD=0.98$) の方が言語 ($M=0.63$, $SD=0.91$) よりも集団プロトタイプ性が高かった。

課題の重要性評価 課題の重要性評価得点を従属変数とした課題領域×性別の分散分析を行ったところ、言語 ($M=6.80$, $SD=2.04$) の方が数学 ($M=4.82$, $SD=2.32$) よりも重要性が高いと評価されていた ($F(1/356)=69.52$, $p<.001$)。

仮説検証

仮説の検証のために、まず回答者の性別と想定させた比較対象の性別との組み合わせによって、内集団比較条件と外集団比較条件を設定した。すなわち、男性回答者、女性回答者ともに同性を比較対象として想定した場合を内集団比較条件、異性を比較対象として想定した場合を外集団比較条件とした。また、回答者の性別と比較された課題の種別の組み合わせによって、課題の内集団-外集団プロトタイプ性を操作した。すなわち、男性が数学課題について回答した場合と女性が言語課題について回答した場合を内集団プロトタイプ性条件、男性が言語課題について回答した場合と女性が数学課題について回答した場合を外集団プロトタイプ性条件とした。

拒否、劣等感、誇り、励みの4得点を従属変数とし、比較条件（内集団上方比較・外集団上方比較）×課題のプロトタイプ性条件（内集団プロトタイプ性・外集団プロトタイプ性）の2要因多変量共分散分析を行った（共変量：課題の重要性評価、集団間比較得点、対象者との親しさの評価）。

多変量検定の結果、比較条件 ($F(4/338)=3.48, p<.01$) と課題のプロトタイプ性条件 ($F(4/338)=2.56, p<.05$) に有意な主効果が認められた。2要因の交互作用効果は有意ではなかった ($F(4/338)=0.13, ns.$)。

そこで、各従属変数について2要因の共分散分析を行ったところ、まず、比較条件の主効果が劣等感得点 ($F(1/341)=7.64, p<.001$) と励み得点 ($F(1/341)=4.45, p<.05$) で認められた。劣等感得点は、内集団上方比較条件 ($Madj=2.74$) の方が外集団上方比較条件 ($Madj=2.41$) よりも高く、励み得点は内集団上方比較条件 ($Madj=3.51$) の方が外集団上方比較条件 ($Madj=3.73$) よりも低かった。

次いで、課題のプロトタイプ性条件の主効果が劣等感得点で認められた ($F(1/341)=9.90, p<.001$)。内集団プロトタイプ性条件 ($Madj=2.77$) の方が外集団プロトタイプ性条件 ($Madj=2.39$) よりも、劣等感得点が高かった。

上述のとおり、多変量検定において有意な2要因の交互作用効果は認められなかった。予備的検討で明らかになったとおり、数学課題と言語課題とではジェンダープロトタイプ性の強さに差がある。この差のある課題を合わせて内-外集団プロトタイプ性条件を構成したことが、2要因の交互作用効果が有意にならなかった理由である可能性がある。

そこで、回答者の性別（男性・女性）、比較対象の性別（男性・女性）、課題領域（数学・言語）の3要因を独立変数とし、拒否、劣等感、誇り、励みの4得点を従属変数とした3要因多変量共分散分析を行った（共変量：課題の重要性評価、集団間比較得点、対象者との親しさの評価）。

多変量検定の結果、回答者の性別と課題領域の2要因 ($F(4/339)=2.67, p<.05$) と回答者の性別と対象者の性別の2要因 ($F(4/339)=3.59, p<.01$)、さらに、回答者の性別、対象者の性別、課題領域の3要因 ($F(4/339)=2.47, p<.05$) に有意な交互作用効果が認められた。

そこで、各従属変数について3要因の共分散分析を行ったところ、まず、回答者の性別と課題領域の2要因の有意な交互作用効果が劣等感得点で認められた ($F(1/342)=10.37, p<.01$)。下位検定の結果、言語で回答者の性別に有意な単純主効果 ($F(1/342)=9.27, p<.01$)、数学で回答者の性別の有意な単純主効果の傾向 ($F(1/342)=3.36, p<.07$) が認められた。男性は女性と比較して、言語の領域では低い劣等感得点を示し、数学においては高い劣等感得点を示していた。また、男性回答者と女性回答者の双方において、課題領域の単純主効果が有意であった（男性回答者： $F(1/342)=4.28, p<.05$ ；女性回答者： $F(1/342)=6.91, p<.01$ ）。男性は言語においてよりも数学においての方が高い劣等感得点を示し、女性は数学においてよりも言語においての方が高い劣等感得点を示した。

次いで、回答者の性別と対象者の性別の2要因の有意な交互作用効果が、劣等感得点 ($F(1/342)=$

8.08, $p < .01$) と励み得点 ($F(1/342) = 4.45$, $p < .05$) に認められた。劣等感得点についての下位検定の結果、女性比較対象者における回答者の性別の単純主効果 ($F(1/342) = 6.61$, $p < .05$) と女性回答者における対象者の性別の単純主効果 ($F(1/342) = 7.61$, $p < .01$) が有意であった。一方、励み得点についての下位検定の結果、男性比較対象者における回答者の性別の単純主効果 ($F(1/342) = 4.12$, $p < .05$) と男性回答者における対象者の性別の単純主効果 ($F(1/342) = 6.38$, $p < .01$) が有意であった。同性に対しては異性に対してよりも劣等感を感じやすく、励みを感じにくいことが示された。

さらに、3要因の有意な交互作用効果が劣等感得点に認められた ($F(1/342) = 7.81$, $p < .01$) (Table 1)。回答者の性別ごとに比較対象の性別×課題領域の2要因共分散分析を行ったところ、男性回答者では2要因の交互作用が有意な傾向を示し ($F(1/145) = 3.58$, $p < .07$)、女性回答者では課題領域の主効果 ($F(1/194) = 4.08$, $p < .05$)、対象者の主効果 ($F(1/194) = 8.03$, $p < .01$)、2要因の交互作用 ($F(1/194) = 3.90$, $p < .05$) がいずれも有意だった。男性回答者における2要因の交互作用についての下位検定の結果、言語における対象者の性別の単純主効果 ($F(1/145) = 5.15$, $p < .05$) と女性対象者における課題領域の単純主効果 ($F(1/145) = 5.51$, $p < .05$) がそれぞれ有意だった。次に、女性回答者における2要因の交互作用についての下位検定の結果、言語における対象者の性別の単純主効果 ($F(1/194) = 11.65$, $p < .001$) と女性対象者における課題領域の単純主効果 ($F(1/194) = 7.96$, $p < .01$) がそれぞれ有意だった。

Table 1
Adjusted Mean Score of Inferiority as a Function of Respondents' and Comparison Targets' Sex and Task Area

Respondents/ Task area	comparison target	
	Men	Women
Men/		
Math	2.69	2.77
Verbal	2.64	2.03
Women/		
Math	2.36	2.48
Verbal	2.48	3.20

【考 察】

以上の結果は、まず仮説1を支持するものであった。人は内集団の上方比較対象に対して、外集団の上方比較対象に対してよりも強い劣等感を示し、またそれらの対象を励みとする程度は低かった。人は、内集団の人びとの間で自己評価を維持・高揚することへの関心を高くもつ傾向がある (Brewer & Weber, 1994, Goethals & Darley, 1997)。そのため、そのような自己評価の維持高揚を脅かす存在となりうる上方比較対象は劣等感を引き起こし、またそのような対象との距離を置こうとするため、あまり励みにしようとはしなかったものと考えられることができる。

また仮説2も支持された。回答者は、内集団プロトタイプ性の高い課題での上方比較対象に対して、外集団プロトタイプ性の高い課題での上方比較対象に対してよりも強い劣等感を示した。内集団プロトタイプ性の高い課題での成績は、個人の社会的アイデンティティの重要な基盤である。そのためそのような課題で自分が他者よりも劣っていることを認識することによって、強い劣等感が喚起されたも

のと考えることができる。

仮説3と4はいずれも部分的に支持された。仮説3は内集団の上方比較対象によって生じる脅威の程度が、課題のプロトタイプ性によって異なることを述べたものである。結果は、女性回答者においてのみこの仮説を支持するものであった。すなわち、女性は言語課題で自分より優れた女性に対して、数学課題で自分より優れた女性に対してよりも強い劣等感を感じていた。

仮説4は外集団の上方比較対象によって生じる脅威の程度が、課題のプロトタイプ性によって異なることを述べたものである。結果は、男性回答者においてのみこの仮説を支持するものであった。すなわち、男性は数学課題で自分よりも優れている女性に対してよりも、言語課題で自分よりも優れている女性に対して低い劣等感を感じていた。

仮説3と仮説4が部分的な支持にとどまった理由として、男女それぞれに対するジェンダースtereオタイプの影響が考えられる。男性は女性と比較してより多くの課題で有能であるとみなされ (Deaux, 1976)、また多くの課題での成功を期待されているという (Swim & Sanna, 1996)。逆にいえば、女性は男性と比較してより限定的な領域での成功しか期待されていないことになる。とすれば、男性の比較対象に対する反応に及ぼす課題特性の影響は、女性の比較対象に対するそれよりも小さなものになり、逆に、女性の比較対象に対する反応に及ぼす課題特性の影響は大きくなるだろう。このことは、男性回答者であれ女性回答者であれ、上方比較対象が女性である場合にのみ、劣等感の程度に課題のジェンダースtereオタイプ性の違いが反映されるようになることを意味する。事実、Table 1に示されたとおり、男性回答者でも女性回答者でも、男性の比較対象においては課題領域間で劣等感得点にほとんど差が認められていないのに対して、女性の比較対象においては課題領域間で劣等感得点に大きな差が認められている。

このような比較対象のジェンダーによる反応の偏りがあるため、仮説3と仮説4とは部分的な支持にとどまったと考えることができる。今後は、このようなジェンダースtereオタイプの影響を考慮した要因計画に基づいてより詳細な検討を行う必要がある。

第2部 個人であることの2つの側面と内集団での個人間上方比較

内集団成員との上方比較の影響

研究1では、人は内集団の上方比較対象によって自己評価に脅威を感じる事が示された。自己評価維持モデルでは、このような時人はその対象との対人的な距離を拡大することによって脅威から逃れようとすることもあると考える。このような自分よりも優秀な成員との間の距離を広げることは、脅威回避戦略として一時的には個人の適応水準の向上に寄与するかもしれない。しかし、それは時として優秀な成員に対する嫉妬や、その成員の排斥という結果につながるかもしれない。

そのような結果は、比較される側にとっても、比較する側にとっても、さらには集団全体にとっても長期的には不適応をもたらすことになりかねない。比較される側にとっては、自分が上方比較の対象となることでストレスを感じ (Juola-Exline & Lobel, 1999)、他成員からの排斥を恐れて、自らの成果を意図的に抑制する (Pappo, 1983) こともある。比較する側にとっては上方比較対象者がそのような行動を取ることで優秀な成員としての役割モデルを失うことになる。もちろん、これらの過程を通して集団全体は潜在的には得られるはずの高い業績を失うことにもなる。

どうすれば、集団内の上方比較過程によって生じるこれらの損失が抑制できるのだろうか。この問題について、ここでは内集団-外集団関係を取り上げ、この関係と人が個人であろうとする際の志向性との関連を検討する。

集団間の地位の変動可能性と内集団での個人間比較

この問題を考える上で重要な要因のひとつに、集団間における地位の変動可能性がある。内集団と外集団との間に何らかの地位差がある場合、その差の変動可能性の高低によって、自分よりも優れた内集団成員に対する人びとの態度に差が生じることが見出されてきた。

たとえばBlanton, Christie, and Dye (2002) は、人が内集団のネガティブなステレオタイプをどのように捉えるかによって、他の内集団成員との間に比較過程が生じるか反映過程が生じるかが起こるかが異なることを明らかにした。具体的には、内集団が外集団より劣っているという信念を高く持つ者は、外集団成員より内集団成員との比較過程に従事しやすいのに対して、そのような信念を持たない者は内集団成員との比較過程が抑制されることが示された。

このBlanton et al. (2002) は内集団が外集団に劣っている状況、すなわち集団間上方比較状況のみを扱っている。これに対して、Isobe, Ura, and Hasegawa (accepted) は集団間下方比較状況、すなわち内集団が外集団よりも優れている状況も加えて、より包括的な過程を検討した。この研究では、集団間比較の方向として上方比較と下方比較の双方を取り上げ、集団間地位差の変動可能性を左右する要因として個人の内集団評価を取り上げた。低地位集団内にあっても、内集団評価の高い個人であれば、地位の変動可能性を高く見積もるだろう。逆に低地位集団に所属し、かつ内集団評価の低い個人は地位の変動可能性を低く見積もるだろう。一方、高地位集団において内集団評価の高い個人は、地位の変動性を低く、内集団評価の低い個人は地位の変動性を高く見積もるだろう。

このようにIsobe et al. (accepted) では、集団間での地位の変動可能性の高低を、集団の地位の高低と内集団評価との組み合わせによって設定した。そして、この地位の変動可能性の高低によって、個人が内集団の上方比較対象と下方比較対象それぞれにいかなる態度を示すのかが検討されたのである。結果は仮説を支持し、高地位集団であれ低地位集団であれ、集団間での地位の変動可能性が低い場合、人は内集団における比較過程に従事しやすく、逆に、集団地位の変動可能性が高い場合には、人は内集団における反映過程に従事しやすいことを示していた。

これらの結果は社会的アイデンティティ理論の枠組みからは次のように整理することができるだろう。集団地位の変動可能性が高いということは、低地位集団の成員にとっては自らの社会的アイデンティティを高める可能性が高いことを意味する。そのため、内集団成員に自分よりも優秀な者がいた場合、その対象に自らを反映させることによって、社会的アイデンティティの高揚を図ろうとするのである。逆に、高地位集団の成員にとって、集団地位の変動可能性の高さは自らの社会的アイデンティティが脅かされる可能性もまた高いことを意味する。そのため、やはり内集団の優れた他者に自らを反映させ、社会的アイデンティティをより安定したものにさせようとしたのである。

ステレオタイプの信念と内集団成員との上方比較

以上に述べてきたBlanton et al. (2002) やIsobe et al. (accepted) はいずれも、集団間の地位関係と集団に対する個人の志向性によって、地位の変動可能性を捉えたものである。

これに対して、磯部・浦（投稿中）は個人の持つステレオタイプの信念に着目し、集団間に地位の差が顕著でない場合でも、同様の過程が認められることを明らかにした。

一般に、ステレオタイプの信念を高く持つ者はそうでない者と比較して、集団間の相互交換可能性を低く見積もる。そのため、そのような個人の対人関係は、内集団の中でのみ展開されがちになるだろう。とすれば、そのような個人は集団内での対人関係の中で自己評価を維持・高揚させることに関心が向く。その結果として、ステレオタイプの信念を強くもつ者ほど、内集団での個人間上方比較の影響を強く受けるようになると考えられる。磯部・浦（投稿中）では、性役割に対するステレオタイ

的信念を題材としてこの予測を検討した。結果は、男女ともに伝統主義的性役割態度をもつ者はそうでない者と比較して内集団の上方比較対象からネガティブな影響を強く受けることを示していた。

以上の知見を考え合わせると、人は内集団と外集団に関わるステレオタイプの信念から自由であるほど、内集団における個人間比較の影響を受けにくいといえるだろう。研究1で扱われた課題のプロトタイプ性との関連でこのことを具体的に述べるならば、次のようになろう。たとえば男は男らしくあらねばならないというステレオタイプの信念を強く持つ男性にとって、男性プロトタイプ性の高い課題で同じ内集団成員である男性に劣ることは大きな脅威となるだろう。これに対してそのような信念を持たない男性にとっては、少なくとも内集団成員に劣ることが直接的に脅威をもたらす原因にはなりにくいだろう。

内集団成員としての上方比較対象と個人としての上方比較対象

しかしながら、このことが直ちに、ステレオタイプの信念を持たない者が、上方比較一般から影響を受けにくいことを意味するわけではない。社会的比較過程に関する諸理論では、個人と個人の近しさが社会的比較過程の生起にとって重要な条件となるとしている (Festinger, 1954; Tesser, 1988)。内集団成員としてのアイデンティティは個人間の近さの要因のひとつにすぎない。そのような社会的アイデンティティに基づく近しさではなく、個人的アイデンティティに基づく近しさもまた社会的比較の重要な条件であることは論を待たない。

こう考えるならば、内集団成員としての上方比較対象と個人としての上方比較対象とは区別して考える必要のあることがわかる。前者から受ける脅威は、内集団-外集団に関わるステレオタイプから自由であることで緩和されるだろう。しかし、後者から受ける脅威はそれだけでは緩和されにくい。なぜならば、社会的アイデンティティに基づく近しさの影響から自由であることが、個人的アイデンティティに基づく近しさの影響から自由であることを必ずしも保障しないからである。

内集団での個人間上方比較と個人性の2要素

以上の議論に基づけば、内集団での個人間上方比較の悪影響を緩和するためには、社会的アイデンティティを基盤とした比較から自由であることと個人的アイデンティティを基盤とした比較から自由であることの2つの条件が必要であるということになる。

このような2つの条件を満たす要因を探る上で、個人性の2要素理論を展開するKampmeier and Simon (2001)の主張は興味深い。彼女らは、個人は自己を独立としての自己と差異としての自己の2つの要素で捉えると主張する。ここで独立とは所属集団の成員性によって強いられている制限や抑制からの自由を意味し、差異とは文字どおり他者との差異を意味する。

これら個人性の2要素ともに高い者は、上記2つの条件をともに満たすものであることが理解できるだろう。独立とは上述のとおり所属集団の制限や抑圧からの自由を意味する。これは言い換えれば、独立性の高い個人は内集団-外集団に関連するステレオタイプから自由であることを意味する。一方、差異性とは他者からの差異であり、他者との類似性を避け、独自の存在であろうとする志向性を意味する。

したがって、まず独立性の高い者はその低い者と比較して、内集団を比較の準拠枠として用いる傾向が低いだろう。また、差異性の高い者はその低い者と比較して、個人間の類似性に基づく比較を行おうとする傾向が低いだろう。これら2つの予測から、さらに、独立としての個人性も差異としての個人性もともに高い者は、内集団成員としての上方比較対象の影響を受けにくく、さらに個人としての上方比較対象の影響もまた受けにくいと予測できる。

以上の予測の検討のために、以下ではまず研究2において、個人性の2要素の程度を測定するための尺度(Kampmeier & Simon, 2001)の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認する。その上で、研究3で上述の内集団での比較に及ぼす個人性の2要素の影響を検証する。最後に研究4で、個人性の2要素の影響過程についての代替仮説の可能性について検討する。

研究2 個人性の2要素尺度日本語版の作成

ここではKampmeier and Simon (2001)の尺度を用いて個人性が2要素からなることを示し、その尺度の信頼性と妥当性を検証する。妥当性の検証のために、まず独立性、差異性それぞれの尺度得点と文化的自己観得点との関連を見ることで併存的妥当性を確認する。文化的自己観は個人が相互に独立したものであるという相互独立的自己観と、個人は相互に協調しあうものであるという相互協調的自己観の2次元からなる。このうち相互独立的自己観は、自己を制限や抑圧から独立した存在であるとみなす独立性とは高い正の関連を、自己を他者と異なった存在であるとみなす差異性との間には弱いあるいは中程度の正の関連を示すことが予測される。一方、相互協調的自己観は個人間の相互依存性を前提とした自己観であることから独立性とは中程度の負の関連を示すことが、また差異性との間には関連が認められないことが予測される。

これら併存的妥当性の検討とともに、ここでは構成概念妥当性の検討のため、異なる特性を持つ集団への選好の程度と独立性・差異性との関連を調べる。個人性の2要素理論によれば、人は自己を独立の観点から見た場合には集団内の多様性を志向するようになり、自己を差異の観点から見た場合には少数派集団を志向するようになるという。そうであるとすれば、独立性得点が高いほど成員間の多様性の高い集団への志向性が高まり、差異性得点が高いほど社会的な少数派集団への志向性が高まることが予測される。

【方 法】

回答者

5つの異なるサンプルからデータを収集した。サンプル1、サンプル2、サンプル4、サンプル5の回答者は地方国立大学の心理学関連の授業の受講生であり、その所属学部は多岐に渡っている。サンプル3の回答者は地方私立大学の心理学関連の学科の学生である。サンプル1からサンプル3までには2002年夏、サンプル4には2003年夏、サンプル5には2003年秋に調査を実施した。それぞれのサンプル数はTable 3に示したとおりである。なお、再テスト信頼性の検討のため、サンプル1では1か月の間隔を、サンプル3では5ヶ月の間隔をそれぞれあけて2度調査を実施した。

尺 度

個人性の2要素尺度日本語版 Kampmeier and Simon (2001)による8項目からなる尺度を日本語に翻訳した。8項目中4項目は独立としての個人性を表すものであり、4項目は差異としての個人性を表すものである。いずれも自己をどのようなものとして捉えているかについて記述したものであり、「まったくちがう」(0点)から、「まさにそのとおりだ」(6点)までの7段階で評定を求めるものである。具体的な項目をTable 2に示した。

内集団の多様性への選好測定項目 回答者に「メンバーの考え方が似かよっている集団」と「さまざまな考え方のメンバーがいる集団」のどちらをより居心地がよいと感じるかを9件法の双極尺度で問うものである。得点が高いほど多様性の高い集団を好むことを意味する。なお、この項目については、

サンプル1に対する2度目の調査の際に回答を求めた。

少数派集団への所属の選好測定項目 内集団の多様性への選好測定項目と同様の項目で「社会の中での多数派の集団」と「社会の中での少数派の集団」のどちらをより居心地がよいかを問うものである。得点が高いほど少数派集団を好むことを意味する。なお、この項目についてはサンプル1に対する2度目の調査の際に回答を求めた。

文化的自己観尺度 高田・大本・清家(1995)の文化的自己観尺度を用いた。この尺度は20項目から構成され、相互協調的自己観、相互独立的自己観のそれぞれについて10項目からなる尺度である。「全く当てはまらない」(1点)から「ぴったり当てはまる」(7点)の7件法で回答を求めるもので、得点が高いほど、それぞれの自己観を高い水準で有していることを意味する。なお、この尺度にはサンプル4の回答者のうち、1か月後に行われた調査に参加した345名が回答した。

【結果と考察】

2要素尺度8項目の基礎統計量はTable 2に示したとおりである。

Table 2
Simple Statistics of Two Individuality Component Scale-Japanese Version
(n=1038)

	Mean	SD
独立性項目		
私は自信に満ちている	2.74	1.45
私はいろいろなことを一人で決められる	3.39	1.39
私が何をするかを決めるのは私自身だ	4.53	1.23
私は自律的である	3.34	1.31
差異性項目		
私には変わったところがある	4.14	1.20
私は他者と違っている	4.03	1.25
私はユニークである	3.40	1.30
私は他にはない特徴を持っている	3.51	1.35

2要素尺度についての確認的因子分析の結果ならびに信頼性に関する指標をTable 3に示す。確認的因子分析では、本尺度が2因子構造であることを仮定するモデルの適合性を検証した。Table 3に示されたとおり、2因子モデルの適合性は高い水準にある。よって個人性が独立と差異の2次元で捉えうるものであることが確認された。また信頼性については、 α 係数がやや低いケースが認められるものの、折半法による信頼性係数も再テスト信頼性も高い値を示しており、本尺度は2次元ともに高い内的整合性と安定性を有するものと判断できる。

次いで、個人性の2次元と文化的自己観の2次元、成員性の多様性への選好ならびに少数派集団への選好との相関をTable 4に示す。各変数について、上の行の数値は0次相関を、下の行の数値は他方の個人性要素の影響を統制した偏相関をそれぞれ示している。

Table 4を見ると、まず独立としての個人性が相互独立的自己観と高い有意な正の相関を、相互協調的自己観と低い有意な負の相関をそれぞれ有していることが分かる。一方、差異としての個人性は相互独立的自己観と低い有意な正相関を示しており、相互協調的自己観との間には有意な相関が認めら

Table 3
Reliability of the Two Individuality Component Scale-Japanese version

	sample 1 (n=165)	sample 2 (n=174)	sample 3 (n=157)	sample 4 (n=459)	sample 5 (n=84)	aggregated sample (n=1038)
confirmatory factor analysis						
GFI	.937	.936	.928	.935	.907	.948
AGFI	.880	.878	.864	.877	.824	.901
CFI	.915	.893	.906	.883	.913	.898
Cronbach's α						
independence	.637	.679	.745	.727	.732	.713
differentiation	.791	.726	.743	.717	.746	.732
split half (Spearman-Brown)						
independence	.654	.707	.788	.740	.775	.739
differentiation	.762	.741	.770	.739	.834	.753
test-retest reliability						
1 month interval						
independence	.794					
differentiation	.796					
5 months interval						
independence			.593			
differentiation			.547			

Table 4
Validity of the Two Individuality Component Scale-Japanese version
 (n=345)

	independence	differentiation
cultural self		
independence	.721***	.388***
	.676***	.147**
cooperation	-.335***	-.103†
	-.328***	.029
preference for		
diversity of in-group	.231***	.174*
membership	.195*	.121
minority group	.111	.242**
	.050	.222**

***p<.001 **p<.01 *p<.05 †p<.10

Note. Values at upper parts and lower parts of cells are respectively zero-order correlation and partial correlation controlled with the counterpart.

れない。これらの結果はいずれも予測を支持するものであり、個人性の2要素尺度の併存的妥当性が確認された。

さらに、異なる特性を持つ集団への選好との関連を見ると、独立としての個人性要素は成員性の多様性への選好とのみ、差異としての個人性要素は少数派集団への選好とのみ、それぞれ有意な偏相関を示している。これは理論的に予測されたとおりの関連であり、本尺度の構成概念妥当性の高さを示すものであるといえる。

研究3 内集団での個人間上方比較過程に及ぼす個人性の2要素の影響(1)

ここでは研究2でその信頼性と妥当性が確認された尺度を用いて個人性の2要素を測定し、それらが内集団での個人間比較過程に及ぼす影響を検討する。すでに述べたとおり、個人性の2要素である独立としての個人性と差異としての個人性がともに高い者は、社会的アイデンティティを基盤とした比較からも個人的アイデンティティを基盤とした比較からも自由であると考えられる。よって、ここでの仮説は以下のとおりである。

仮説 独立と差異の個人性の双方を高く志向する者は他の者と比較して、内集団成員との個人間上方比較によるネガティブな影響を受けにくいだろう。

【方 法】

回答者・対象人物の想起・尺度 研究1と同じ。

条件の再定義 まず、回答者と比較対象とが同性の場合（男性－男性、女性－女性）を内集団上方比較条件、回答者と比較対象とが異性の場合（男性－女性、女性－男性）を外集団上方比較条件とした。また、回答者を課題のジェンダー特性と性別との組み合わせによって、両者が一致している群を内集団プロトタイプ性条件、一致していない群を外集団プロトタイプ性条件とした。

【結 果】

まず、回答者を独立性得点、差異性得点それぞれの中央値（いずれも3.5）で高低2群に分類した。そして、拒否、劣等感、誇り、励みの4得点を従属変数とし、比較条件（内集団上方比較・外集団上方比較）×課題のプロトタイプ性条件（内集団プロトタイプ性・外集団プロトタイプ性）×独立性（高・低）×差異性（高・低）の4要因で多変量共分散分析を行った（共変量：課題能力の重要性評価、集団間比較得点、対象者との親しさの評価¹⁾）。

多変量検定の結果、比較条件の主効果 ($F(4/331)=3.32, p<.05$)、課題のプロトタイプ性条件の主効果 ($F(4/331)=3.35, p<.05$)、独立性の主効果 ($F(4/331)=3.98, p<.01$)、差異性の主効果 ($F(4/331)=2.46, p<.05$)、比較条件、独立性、差異性の3要因の交互作用効果 ($F(4/331)=2.55, p<.05$) がいずれも有意であった。

そこで、各従属変数について4要因の共分散分析を行ったところ、まず比較条件の有意な主効果、あるいは有意な主効果の傾向が、劣等感得点 ($F(1/334)=8.11, p<.01$) と励み得点 ($F(1/336)=3.38, p<.07$) で認められた。内集団成員に対しての方が、外集団成員に対してよりも高い劣等感を感じ、またあまり励みにはならないと感じていた。次いで、課題のプロトタイプ性条件の有意な主効果が劣等感得点で認められた ($F(1/334)=13.04, p<.001$)。内集団プロトタイプ性条件の回答者の方

が外集団プロトタイプ性条件の回答者よりも高い劣等感得点を示していた。さらに、独立性の主効果が劣等感得点において認められた ($F(1/334)=14.79, p<.001$)。独立性低群の方が独立性高群よりも高い劣等感得点を示していた。また、差異性の有意な主効果あるいは有意な主効果の傾向が、拒否得点 ($F(1/336)=9.21, p<.01$) と誇り得点 ($F(1/336)=2.91, p<.10$) で認められた。差異性低群の方が差異性高群よりも高い拒否得点と低い誇り得点を示していた。

最後に、比較条件、差異性、独立性の有意な3要因交互作用効果が劣等感得点に認められた ($F(1/335)=4.39, p<.05$) (Table 5)。そこで、内集団上方比較条件と外集団上方比較条件のそれぞれで差異性と独立性の2要因共分散分析を行ったところ、内集団上方比較条件でのみ2要因の交互作用効果が有意な傾向を示した ($F(1/183)=3.53, p<.07$)。この交互作用についての下位検定の結果、差異性高群における独立性の単純主効果が有意であり ($F(1/182)=17.55, p<.001$)、独立性高群における差異性の単純主効果が有意な傾向にあった ($F(1/182)=2.77, p<.10$)。

Table 5
Adjusted Mean Score of Inferiority as a Function of Respondents' Level of Independence and Differentiation and Group Context

Group Context/ Level of Differentiation	Independence	
	Low	High
Ingroup		
Low differentiation		
Study 3	2.98	2.75
Study 4	2.86	2.97
High differentiation		
Study 3	3.14	2.21
Study 4	3.11	2.35
Outgroup		
Low differentiation		
Study 3	2.62	2.19
Study 4	2.57	2.02
High differentiation		
Study 3	2.42	2.34
Study 4	2.29	2.44

【考 察】

仮説は支持された。人は上方比較対象者に対して、その対象者が外集団メンバーである場合よりも内集団メンバーである場合の方が、強い劣等感を感じ、またその他者を自らの励みとすることは少なかった。しかしながら、そのような内集団メンバーに対する劣等感、自らを独立性と差異性の双方で高く評価する個人においては、それ以外の個人においてよりも低く抑えられたのである。個人が自己をどのように定義するかによって、内集団における上方比較から受けるインパクトの強さが異なることが示された。

ところで、このような考察には自尊心レベルの効果による代替説明の可能性がある。従来、高自尊心者は低自尊心者と比較して、社会的比較によるネガティブな影響を受けにくいことが示されてきた (e.g., Schlenker, Weigold, & Hallam, 1990; Wheeler & Miyake, 199; Buunk, Collins, Taylor, Van

Yperen, and Dakof, 1990; Taylor, Wayment, & Carrillo, 1996)。そして、個人性の2要素尺度のうち、独立性項目は自尊心と密接に関連すると思われる内容からなっている。そのため、ここで得られた3要因の交互作用効果が、回答者の自尊心の程度によって説明されるものである可能性がある。そこで、研究4ではこの代替説明の妥当性を検討することとする。

研究4 内集団での個人間上方比較過程に及ぼす個人性の2要素の影響(2) —自尊心の影響の検討—

個人性の2要素理論によると、独立性の高さは内集団によって強いられる規制や内集団成員が共通して持っているステレオタイプから自由であろうとする個人の志向性を表していると考えられている。研究3では、このような独立性に他者との差異への志向性を表す差異性が組み合わさることで内集団での個人間比較から受ける悪影響が緩和されるだろうという仮説を導き、それを検証した。

結果はこの仮説を支持する有意な3要因交互作用効果を示していた。しかし、この効果についてひとつの代替説明がありうる。それは、独立性の効果が自尊心の効果と交絡している可能性に基づく説明である。

個人性の2要素尺度のうち独立性を測定するための項目には、たとえば「私は自信に満ちている」といった、個人の自尊心の高さを表すものが含まれている。したがって、独立性と自尊心との間には高い相関が認められる可能性がある。

もし、これら2つの間に高い相関が認められるとすると、研究3で得られた結果は独立性の影響を反映したものではなく自尊心の影響を反映したものであるとの代替説明が可能になる。それは従来、自尊心と社会的比較過程やその結果との間に密接な関連のあることが見出されてきたからである。たとえば、高自尊心者は低自尊心者に比べ、より強いself-servingバイアスを示す(e.g., Schlenker, Weigold, & Hallam, 1990)ことや、下方比較に従事しやすい(Wheeler & Miyake, 1992)こと、また、下方比較にさらされた時、高自尊心者は低自尊心者よりも肯定的な感情を経験しやすいこと(Buunk, Collins, Taylor, Van Yperen, and Dakof, 1990)などが示されてきた。これらの結果から、高自尊心者は、低自尊心者より、社会的比較の情報を好ましい意味へと再構築するスキルが高い可能性が指摘されている(Taylor, Wayment, & Carrillo, 1996)。

とするならば、研究3で認められた3要因交互作用は、独立性による内集団の制限からの自由を反映したものではなく、自尊心と社会的比較情報の再構築スキルとの関連を反映したものであるとの代替説明も可能になる。そこで本研究ではこの代替説明の妥当性を検討するため、まず研究3の回答者の自尊心を測定し、それと個人性の2要素、とりわけ独立性との関連を検証する。その上で、自尊心得点を共変量に追加した分析を行うこととする。自尊心と独立性との間に高い相関が認められ、自尊心の影響を統制すると研究3で認められた3要因交互作用が認められなくなるならば、代替説明の妥当性が確認されることになる。逆に、自尊心の影響を統制しても研究3で認められた3要因交互作用が認められるならば、代替説明は退けられることになる。

【方 法】

回答者 研究2ならびに研究3の回答者のうち、1ヵ月後に実施した調査においてRosenbergの自尊心尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)に回答した288名(男子112名、女子176名)。

【結 果】

まず、自尊心と独立性・差異性との間の関連を検討するため、自尊心得点を基準変数、独立性得点と差異性得点を説明変数とする重回帰分析を行った (Table 6)。Table 6から、独立性と自尊心との間には密接な関連のあることが確認された。

Table 6
Multiple Regression Analysis on the Relationship of Self-esteem and Two Components of Individuality.

	β	$p <$
Independence	.417	.001
Differentiation	-.067	ns.
R^2	.158	.001

そこで、研究3で行った多変量共分散分析の共変量に、さらに自尊心得点を加えた分析を行った。すなわち、拒否、劣等感、誇り、励みの4得点を従属変数、比較条件 (内集団上方比較・外集団上方比較) × 課題のプロトタイプ性条件 (内集団プロトタイプ性・外集団プロトタイプ性) × 独立性 (高・低) × 差異性 (高・低) の4要因を独立変数とし、共変量として課題能力の重要性評価、集団間比較得点、対象者との親しさの評価にさらに自尊心得点を加えた、共分散多変量分析を行った。多変量検定の結果、比較条件に有意な主効果 ($F(4/258)=2.59, p < .05$)、独立性に有意な主効果の傾向 ($F(4/258)=2.12, p < .08$)、比較条件、独立性、差異性の3要因に有意な交互作用効果 ($F(4/258)=3.58, p < .01$) がそれぞれ認められた。そこで、各従属変数について3要因の共分散分析を行ったところ、まず比較条件の有意な主効果が劣等感得点 ($F(1/261)=8.30, p < .01$) で認められた。内集団上方比較対象に対しての方が、外集団上方比較対象に対してよりも強い劣等感を感じていた。次いで、独立性の有意な主効果あるいは有意な主効果の傾向が劣等感得点 ($F(1/258)=3.97, p < .05$) と誇り得点 ($F(1/258)=2.89, p < .10$) において認められた。独立性低群の方が独立性高群よりも高い劣等感得点と低い誇り得点を示していた。

最後に、比較条件、差異性、独立性の有意な3要因交互作用効果が劣等感得点に認められた ($F(1/258)=8.37, p < .01$) (Table 5)。なお、共変量の効果は全て有意だった。そこで、内集団条件と外集団条件のそれぞれで差異性と独立性の2要因共分散分析を行ったところ、内集団条件でのみ2要因の交互作用効果が有意であった ($F(1/142)=4.98, p < .05$)。この交互作用についての下位検定の結果、差異性高群での独立性の単純主効果 ($F(1/142)=7.84, p < .01$) と独立性高群での差異性の単純主効果 ($F(1/142)=4.08, p < .05$) が有意であった。

【考 察】

以上の結果は研究3で認められた比較条件、独立性、差異性の3要因交互作用の有意性が、自尊心得点を共変量に含めても消えないことを示している。このことから、これら3要因の交互作用効果が個人の自尊心の差によって生じたものであるとの代替説明は退けられうる²。

【総合考察】

第1部と第2部のいずれにおいても共通して見出された結果は、一般に内集団の上方比較対象者は外集団の上方比較対象者よりも、そして内集団プロトタイプ性の高い課題での上方比較は、外集団プロトタイプ性の高い課題での上方比較よりも、自己評価にとっての脅威となりやすいということである。これらの結果は、内集団成員性に基づく社会的アイデンティティが個人の自己評価にとって重要な源泉であることを確認するものである。

しかし、これら2要因の交互作用効果を予測した、研究1の仮説3と仮説4は部分的に支持されるにとどまった。すなわち、内集団の上方比較対象によって生じる脅威の程度が、課題のプロトタイプ性によって異なるとした仮説3は女性回答者においてのみ支持された。一方、外集団の上方比較対象によって生じる脅威の程度が、課題のプロトタイプ性によって異なることを述べた仮説4は男性回答者においてのみ指示された。

これら2つの仮説が部分的に支持されるにとどまったとして本研究で指摘したのは、ジェンダーにかかわるステレオタイプが社会的に男女の間で非対称なものであるということであった。ただし、この点については本研究では実証的に検討しているわけではない。今後はこの点についてのより慎重な検証を踏まえた上で、非対称性の少ない題材を用いた検討が必要である。

内集団の上方比較対象から引き起こされる脅威は、個人性の2要素の組み合わせのあり方によって緩和されることもあることが示された。すなわち、独立性と差異性の2側面で自己を高く評価する個人はそのような比較から受けるダメージが最も低かったのである。さらにこの効果は、自尊心の影響を統制してもなお消えなかった。このことから、ここで見出された効果は、独立性の高さによる内集団-外集団に関連するステレオタイプの信念からの自由と、差異性の高さによる個人間の類似性からの自由という2つの条件によって生じたものとの説明の妥当性はかなり高いといっていよう。

ここで、独立性・差異性ともに高い個人とは社会関係に対してどのような志向性を持っている人物なのだろうか。独立性の高さは集団による規制やメンバーの均一性から自由であろうとする志向性の高さを意味する。とすれば、これはカテゴリー成員性に基づく集合的なアイデンティティを高めることへの志向性の低さと密接に関連するだろう。一方の差異性の高さは他者との類似性や均質性から自由であろうとする志向性の高さである。そのため、これは個人的なアイデンティティに対する強い志向性を表しているものといえる。したがって、これら両志向性ともに高い個人は、カテゴリー成員性に基づく集合的な自己認識を得ることに對しても、周囲の他者との間で形成される関係的な自己認識を得ることに對しても、ともにさほど強く動機づけられない個人であるといえるだろう。いわば、集団からも他者からも自由な個人であることを強く志向する人物であるといえよう。

このような両動機づけの低さは、上方比較対象への関心の低さを意味する可能性がある。言い換えれば、上方比較対象への拒否的態度の低さは、その対象を積極的に受け入れようとするがゆえのものではなく、対象そのものへの関心の低さゆえのものである可能性があるということである。事実、本研究で得られた結果は独立性と差異性がともに高い個人の上方比較対象への拒否的態度の低さを表してはいても、それらの対象への受容的態度の高さを表してはいない。結果に示されたとおり、有意な3要因交互作用効果は劣等感得点においてのみ認められており、励み得点や誇り得点で認められているわけではないのである。

もしこの推論が正しいとすれば、両志向性ともに高い個人は比較の方向が上方であれ、下方であれ、対人的な比較そのものに対して無関心であるため、たとえ下方比較対象であったとしても、それを積極的に受け入れようとはしない可能性がある。もっとも、本研究では比較の方向として上方のみを

扱っていたため、この推論の妥当性は検証できない。今後この点の検討を進めることにより、個人性の2要素に関するより包括的な理解が進むことが期待される。

【引用文献】

- Blanton, H., Christie, C., & Dye, M. 2002 Social identity versus reference frame comparisons. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 253-267.
- Brewer, M. B., & Weber, L. G. 1994 Self-evaluation effects of interpersonal versus intergroup social comparison. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 268-273.
- Buunk, B. P., Collins, R.L., Taylor, S. E., Van Yperen, N. W, & Dakof, G. 1990 The affective consequences of social comparison: Either direction has its ups and downs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1238-1249.
- Deaux, K. 1976 Sex: A perspective on the attribution process. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research (Vol.1)* (Pp.335-352). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- Goethals, G. R., & Darley, J. M. 1977. Social comparison theory: An attributional approach. In J. M. Suls & R. L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* (Pp.259-278). Washington, DC: Hemisphere.
- 磯部智加衣・浦 光博 投稿中 社会的比較における集団間関係の承認の調整効果.
- Isobe, C., Ura, M., and Hasegawa, K. accepted The effects of intergroup and interpersonal context, and individuals' appraisal of their in-group on the intragroup comparison process. *Asian Journal of Social Psychology*.
- Juola-Exline, J. A., & Lobel, M. 1999 The perils of outperformance: Sensitivity about being the target of a threatening upward comparison. *Psychological Bulletin*, 125, 307-337.
- Kampmeier, C. & Simon, B. 2001 Individuality and group formation: The role of independence and differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 448-462.
- Pappo, M. 1983 Fear of success: The construction and validation of a measuring instrument. *Journal of Personality Assessment*, 47, 36-41.
- Schlenker, B. R., Weigold, M.F., & Hallam, J. R. 1990 Self-serving attribution in social context: Effects of self-esteem and social pressure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 855-863.
- Swim & Sanna, 1996 He's skilled, She's lucky: A meta-analysis of observers' attribution for women's and men's successes and failures. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22,507-519.
- Tajfel, H. 1978 *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. New York: Academic Press.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1995 相互独立－相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成．奈良大学紀要、24、157－173.
- Taylor, S. E., Wayment, H. A., & Carrillo, M. 1996 Social comparison, self-regulation, and motivation. In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition (Vol.3), The interpersonal context* (Pp.3-27). New York: Guilford Press.
- Tesser, A. 1988 Towards a self-evaluation maintenance model of social behavior. In L. Berkowitz

- (Ed.), *Advances in experimental social psychology*(Vol.20) (Pp.181-227). New York: Academic Press.
- Wheeler, L. & Miyake, K. 1992 Social comparison in everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.

-
- 1 集団内比較得点を共変量に含めた分析も行ったが、この変数の共変量としての効果はどの従属変数においても有意ではなかったため、最終的な分析では共変量には含めなかった。
 - 2 独立性の代わりに、自尊心の中央値で被験者を高群と低群とに分類し、比較条件（内集団上方比較・外集団上方比較）×課題のプロトタイプ性条件（内集団プロトタイプ性・外集団プロトタイプ性）×自尊心（高・低）×差異性（高・低）の4要因を独立変数とし、課題能力の重要性評価、集団間比較得点、対象者との親しさを共変量とした共分散多変量分析を行ったところ、自尊心については主効果も他の変数との交互作用効果も有意ではなかった。